

進化ゲームと信念の生態学

—社会空間における信念の生態学試論II—

浜 本 満

はじめに

本論考は、すでに書いた二本の論考（浜本 2007a, 2008）の続編である。最初に既出のこの二本の論考において到達した地点の確認から始めたい。

「他者の信念を記述すること」（浜本 2007a）において私は、信念の問題——人が世界についての何らかの命題を信じるとはどういうことかという問題——は、「信じる」という動詞が命題以外のものを目的語にとるケース（「私は友人Aを信じている」とか「私が信じるのは金である」等々）の中でとらえるべきだと主張した。「信じる」という用語の日常的使用においては、人が「信じる」物事とは、世界に対する実践的な企ての中で人が「当てにできる物事」に他ならない。命題が目的語の場合も同様であることがわかる。真なる命題とは、それが述べている事実をまさに当てにして良い、それを踏まえて実践を行ってよい命題に他ならない——逆に偽なる命題とはそれが述べている事実をけっして「当てにしてはならない」命題だということになる——ので、結局信念の問題も、世界との実践的な関わりの中で「あてにできること、できないこと」をめぐる問題としてとらえることが可能なのである。

私はまた、知識の哲学において問題となる「信じていること」と「知っていること」の区別も、それがもっぱら論じられている認識論的な軸——真／偽や、正当な根拠の有無が問題となる——とは別の軸、コミュニケーション空間における他者についての評価という軸で考えることができることを示した（浜本 2007a: 64）。「信じる」という言葉には、真偽の評価に関して異なる立場が存在するという事実を踏まえた上での、選択の要素が含まれている。それに対して「知る」の方には、そうした選択空間が存在しないという含意がある。たとえば私がある命題Pについて、それを「信じている」と語ろうと「知っている」と語ろうと、いずれの場合でも、その対象となる命題Pが述べている事実を私が当てにして考え、振舞おうとする点に違いはない。違いは私がPについて「信じている」という際には、私はその命題と拮抗する他の命題が、私の属する言説空間において現実的なオプションとなっていることを認めている、つまり、Pとは相容れない対抗命題Qを当てにしている他者が存在しうる可能性を認め、Pが複数あるオプションの一つなのだと思っている。それに対し私がPを「知っている」と語る際には、Pではない可能性そのものが現実的なオプションとして想定されていない¹。対抗的オプションの現実的可能性についての評価を下すのが話者であっ

て、かならずしも「信じる」「知っている」という述語の主語とは一致しないことに注意せねばならない。この区別は次のような定式で要約することができる。

「SはPを信じている」はSがPに真という評価をあたえ、かつ話者が自分が所属する言説空間においてPを真と評価しない立場が存在すると判断しているという事態に対応する。Sが話者と一致している場合、それは「私はPを信じる」という一人称の言明となり、一致しない場合「彼（彼女、S）はPを信じている」という三人称を主語とした言明となる。他方、「SはPを知っている」の方は、SがPに真という評価をあたえ、かつ話者が自分の所属する言説空間においてPを真と評価しない立場を見出さないと判断しているという事態に対応する。Sが話者と一致する場合は一人称を主語とした言明となり、一致しない場合は三人称を主語とした言明となる¹²⁾。

「信じている」と「知っている」の区別そのものは、命題を目的語とした場合にしか意味をもたないが、注目すべきはこの両者の区別が、「信じる」という概念に含まれている複数のオプションの存在という含意を、命題を目的語とするケースにおいても確証しているという点である。命題以外のものを目的語にとって、たとえば「私は友人Aを信じている」「私はお金を信じている」という場合には、それは一目瞭然の話である。こうしたことをわざわざ表明したり、自分に言い聞かせたりする際に、私は友人Aをあてにしない生き方や、金以外のものを当てにするオプションが現実的なオプションとして存在しているという事実をもちろん踏まえてものを言っている。友人Aを信じない人も当然いるだろうし、金よりもむしろ愛を信じる人だっているだろう、というわけだ。目的語が命題であれ、他の物事であれ、「信じている」という場合には、つねに複数のオプションの現実的な可能性と、そうした複数性をふまえたうえでの選択——世界への実践的な関わりの中でなされている一種の賭け——の含意がある。賭けはうまく行く場合も行かない場合もあり、お金を信じて行動したおかげで安定した生活が得られたり、孤独で惨めな人生を送ったり、どうなるかは実践が展開される社会空間の属性や、同じ社会空間を共有する他者たちの実践に依存するだろう。

信念、つまり命題を対象に「信じている」ことが問題になる場合には、この賭けの側面は——知識の哲学での取り扱いに典型的に見られるように——ほとんど無視されがちであった。「信念と賭け」（浜本 2008）では、信念の概念に含まれるこの賭けの側面に注目した二人の例外的な哲学者、パスカルとジェイムズの見解をとりあげた。賭けである以上、配当がともなう。パスカルとジェイムズは異なる仕方ではあるが、ともに賭けとしての「信念」の配当に注目した。興味深いことに二人とも、そうした配当への期待を、人が特定の信念をもつにいたる理由としては考えていない。この点で二人の議論は、期待される利得を目的として意思決定がなされる——特定の信念の選択もそうした決定の一つだということになる——とする単純な功利主義的、あるいは合理的意思決定理論とは、はっきり区別されねばならない。パスカルもジェイムズも、特定の信念がいかにやってくるか、人が特定の信念を信じるようになる原因や理由については、あまり多くを語らない。パスカルにとって神への信仰は、人間の側での付度を超えた神の恩寵の賜物でありつねに不意にもたらされるものであるし、ジェイムズは、信念がどんな風にやってくるかはどうでもよいことだとさえ言う。信念の結果の方、つまり特定の命題を「信じる」ことによって何が生じるか、それがどのよ

うな結果を導くかの方が重要なのである。それが大きな利得——救いと永遠の生命——をもたらす割の良い賭けであることを知ることは、パスカルにとって神の存在という証明不可能な命題を信じるのが理性にとっても十分理にかなったものであると示すことである。ジェイムズは、ある命題を信じてなされる実践が結果的にその命題を真理化するプロセスに注目する。ある命題を信じて、特定の社会空間のただなかでなされる実践が、結果としてその命題が真であるような現実をもたらすというケースに彼は注目する。その信念に合致する現実を当の実践が作り出すことによって、結果的にその信念をもつことが「理にかなった」ものになるのである。

浜本2008で論じたように、ジェイムズの一連の議論から見えてくるのは、複数の現実的なオプションが存在し、それぞれのオプションに賭けた（つまりそれを信じた）個々人の実践が相互にせめぎ合い、一連の複雑な社会的プロセスとして絡み合い、そうした絡まりあった真理化のプロセス¹⁹の結果として、それぞれのオプションの配当が決定される、そんなギャンブル空間としての社会空間のヴィジョンである。

本稿では、パスカルとジェイムズの議論が予想させる、こうした信念の生態学とでも呼べる観点の可能性をもう少し具体的に理論化してみたい。

擬似信念

以上の要約からもわかるように、私は信念を認識論の問題とは切り離し、実践との関係において主題化するという方向をとろうと考えている。しかしこの方向にも危うい落とし穴がないわけではない²⁰。何かを信じるということが、世界への実践的ななかかわりのなかで、それを当てにしているということと同じであるというのであれば、実践そのもののなかに信念を見出そうとした方が手取り早いとはいえないだろうか。かくして人は実践の中に埋め込まれた信念のようなものについて語りたい気にさせられることになる。我々のあらゆる振る舞いが世界についての実に多くの物事を当てにして、それらの存在とありようを当て込んでなされていることは事実である。我々はあまりにも多くの信念をもっていることになってしまう。

信念を賭けの角度から眺めてみせ、同時に人間を「精神であると同程度に自動機械である」ともとらえるパスカルは、証拠によって理性的に納得された「精神」による信念よりも、習慣化された自動機械に発する信念に重きを置く見解に一瞬傾いていた。彼は言う。「習慣こそ、我々の最も強固で信じこまれた証拠の源泉である。習慣は自動機械を矯め、精神は、それについて考えすらしないままに、説得されてしまう。明日がまたやってくるということ....を、誰がいったい証明したであろう。それでいてこれ以上よく信じ込まれていることがあるだろうか？」(Pascal 1958: sec.252, p.74)

人類学者たちも明示的に表明されることのない信念、実践やさまざまな制度のなかに埋め込まれた信念、慣行のうちに示される暗黙の神学などについて好んで語ってきた。マダガスカル住民の祖先崇拜をめぐるマノーニは言う。「彼らの態度は、世界中の人々が足元の大地の確固さに対して

もつ態度と同じである。もし誰かがなぜそんなに確かなのかと問うなら、人々はそれに対してありとあらゆる珍妙な説明をでっちあげてくるだろう。単に彼らはそうした問いを問う必要があるなどと、これまで「思ってもいなかったのだから。」そして彼は「この種の信念は難攻不落であり、理性や実験には開かれていないのだ」と付け加える（Mannoni 1990: 50）。そうした信念を正当化する、人々が質問に対してでっちあげてくるその場限りの説明や理由付けよりも、それらが実践そのものの中に「確実な知識」として埋め込まれているという事実の方が重要だというのである。

信念として表明されるかどうかにかかわらず、我々のおこなう無数の日常的な活動のなかには「明日がやってくること」や「足元の大地が確固としている」ことを、まさに当て込んでなされたものが多々あることは確かであるように思える。それらの振る舞いがうまく行くかどうかは、そうした当て込みがまさに満たされるかどうかにかかっている。壁のボタンを怪訝そうに何度も押してみている人は、そのボタンが壁の内部で天井の灯火に結線されていることを、そのことを意識すらせず、当て込んでいるわけであるし、外へ出るなり体を伸ばして思い切り息を吸い込む人は、外の空気中にも酸素が含まれていることを思い切りあてにしているといえる。我々の日々の実践には、それこそ無数の信念が埋め込まれているということになる。

しかしこのように議論を進めていくことで、我々は信念をめぐる問題系のもう一方のレッドゾーンに入り込んでしまっている。それらを「信念」として扱うことに本当に問題はないのだろうか。たしかに人は、「明日が来る」ことを信じていないのか、「空気中に酸素が含まれている」と信じていないのかと問われると、もちろん自分はそう信じていると答えるだろう。浜本2007aで論じたように、人がある命題Pを「信念」として提示するのは、彼の属する言説空間においてPと相容れない命題が主張される現実的な可能性を見てとるときである。したがって彼がそれまで信念として意識したことすらなかったもろもろの事柄でさえ、それらを疑問視するかのような問いの前では、それを信念として語ることが常に可能なのである。しかしこのことは、その命題が、こうした問いにさらされる以前においても彼にとって信念として語りうるものであったということを必ずしも意味しない。生まれてくるなり、おぎゃあと泣いて呼吸をする赤ん坊は、自分が登場する世界の空気に酸素が含まれていることを、何の証明も保証も前もって与えられることなしに、無邪気にあてにしきっているわけであるが、だからといって彼がそうした信念をもっていたとはいかなる意味においても言えない。われわれの生活実践は、この呼吸のように、実に多くの物事を、それらを信念としてもつとかもたないとか言う以前に、まさに「あてこむ」ことの上に成り立っている。

実践に埋め込まれた信念というこの種の考え方は、信念について語ることが全く不適切であるようなあらゆる生物にも拡張されてしまうために、ますます問題含みであることがわかる。たとえば、夜間飛行する蛾は星や月の光のような無限遠光源からの並行光線と一定の角度をとるように、その飛行を制御しているらしい。近い光源からの並行でない光に対しても、並行光線であるかのように飛行を制御してしまうので、結果としてそうした光源にどんどん向かって行ってしまうことになる。飛んで火に入るのである。つまり彼らはすべての夜間の光は並行光線であると言わば「信じて」、そうであることをすっかり「あてにして」飛行する。人工光が登場するまでの何億年かは、と

きおり起こる山火事などを別にすると、それで結構うまく行っていた。が、人間が登場し、やがて夜が無数の人工光によって満たされるようになって、彼らはいいかわらずすべての光を無限遠に光源がある並行光線だと「信じ込んで」いるせいで、角度を一定に保ってまっすぐ飛んでいるつもりで、実際には光源が近くにあり放射状に光線を放っている場合には光源に向かって螺旋を描きながら落ち込んでいってしまうことになるのである。もちろん、こう語ることは比喩である。我々は蛾の精神や信念について比喩的に以上は語りえないことをよく知っている。しかしこの比喩と、人間の実践に埋め込まれた信念についての語りとのあいだに明確な線を引くことができるのだろうか。

カリバチについてのファーブルの研究に感銘を受けたダーウィンは、晩年の手紙の中で、獲物の神経節にたくみに毒針を刺し、獲物を麻痺させて幼虫のえさにするカリバチの狩りの巧妙さが、ランダムな変異とそれに働く自然淘汰によって説明可能な、進化論にとっての好例であると述べている。しばしば語られているように、カリバチに「解剖学の知識」を認めるような「おどろくべきナンセンス」は全く必要ないのだと (Darwin, F., 1896 II: 420-421)。カリバチは、獲物の体のどこに全身を麻痺させる神経節があるのかを「知っている」のだと我々もつい言いそうになるが、そうすることは自然淘汰による進化の産物にたいして、単に比喩的に語ること以上のものではない。

デネットは、ハタオリドリ複雑な巣作りについて述べる際に、おなじぎりのきわどい比喩に訴えている。ハタオリドリは複雑なデザインを持った宙吊りの巣を織り上げるのだが、そこでの彼らの振る舞いは「互いに連動する特定目的の最小限のサブルーチン群」からなっており、それが結果として複雑な巣を作り上げる。こうした自動的で固定された手順の遂行というやり方は、「環境が十分に簡素で規則的で、したがって予測可能でもあるときは、結局のところ必ず驚異的な成功を収めるのである。要するに、このシステムのデザインそのものは、環境はシステムが作動するために必要な状態にあるはずだという、事実上賭けともいえる予想をしている。」(デネット 2001: 493-494) ハタオリドリの遺伝的にプログラムされた巣作り実践は、環境に対して実に多くのことを「あてこんだ」ものである。デネットは、ハタオリドリたちが自分たちの環境が特定の状態にあることを「信じきって」生きているという代わりに、世界はしかじかの状態にあるはずだという彼らの「賭け」について語るのであるが、両者はほとんどおなじことである。信じている主体も、賭けをおこなう主体もいずれにしろどこにもいないのであるから、ともにきわどさにおいては甲乙つけがたい比喩なのである。

こうした生物たちの信念や知性や賭けについて、単なる比喩以上の意味で語ることが不適切であるのは、彼らに人間にあるような信じたり賭けをしたりする「精神」が欠けていることが明らかだからというだけであろうか。ユクスキュルが述べているダニのきわめて単純な生活実践は、彼らの生活空間に哺乳動物が存在していることとか、哺乳動物がその存在を酪酸をあたりに発散して示してくれることとか、実に多くの物事を当て込んでなされている (ユクスキュル 2005: 12-13)。酪酸の濃度のあるポイントで肢を離せば、そのときにちょうど動物が下を通過しているだろうなどという、文字通り博打のようなものまであるが、けっこうはずれることも多いはずのこの賭けですら、

少なくとも彼らの生活をプログラムしている遺伝子たちを後々の世代まで複製し続けるのに十分な程度には勝算がある賭けになっているにちがいない。しかし誰ももちろんダニの信念や、彼らの賭けについて字義通りに大真面目に語る気にはならないだろう。ダニにはもちろんこれらの言葉で語るに値するような精神活動の名に値するものは存在しないからだ、と言いたくもなる。

しかしそう考えると、歴とした精神生活を持っているはずの人間についてであれば、実践そのものに埋め込まれているもろもろ、それが「あてにしている」ところのもろもろを、彼らの信念として扱うことが可能であることになってしまうだろう。生れたばかりの赤ん坊について、空気存在を無邪気に「信じ込んでいる」と語ることが不適切であるのは、その精神の未熟さのせいにすることもできるかもしれない。ではわれわれ大人であれば、空気存在を「信じている」——無意識にであれ、暗黙のうちにであれ、どのような言い方をとろうと——と言ってよいのだろうか。それがもし、われわれ大人の呼吸という日々常に行っている活動が、空気が存在することを完全に当て込んだ活動であるという事実から導き出された信念であるとすれば、赤ん坊やダニの場合とどうちがうというのだろうか。我々は空気が存在するという信念に基づいて呼吸という活動を行っているのだという言い方は、どこか奇妙である。我々は別になんらかの信念に基づいて呼吸しているわけでは、あきらかにないからである。

もちろんこうした純粋に生物学的・生理的な諸活動においては、われわれも基本的にダニと同様だと考えることもできる。その場合は「信念」の候補から、我々の先天的にプログラムされた生物学的、生理的諸活動が「当て込んでいる」もろもろの物事を除外してやればよいだけの話になる。しかし、そうはうまくいかない。足元の大地が確固としていることや、明日がやってくること、についてはどうだろう。それはすでに我々の生物学的・生理的諸活動が「当て込んでいる」事柄にふくめるべきだろうか。明日も職場に行けば自分のデスクがあるだろうというのはどうだろう。蛇口をひねると水が出るだろうというのはどうだろう。我々の生活は、たとえばファーストフード店のカウンターでお金を出せば食事が手に入ることとか、その他無数の事実を当然のように「あてこんだ」うえで展開しているが、われわれはそうしたことについて、どこまで「信念」として語ることができるのだろうか。カリバチについて語った同じ手紙の中で、人間社会についてはときにピントを外した説明に走りがちなダーウィンは、彼の主張をアルゼンチンのガウチョ（土地のカウボーイ）の実践を例にとって説明しようとしている。カリバチに解剖学的知識を帰属させるのがナンセンスなのは、ガウチョたちの実践と同様なのだと彼は言う。ガウチョたちはウシの体のある箇所ナイフを一突きすることによって、巧みにウシを仕留めるのであるが、それは彼らに解剖学的な知識があるからではなく、はじめはランダムにいろいろな場所を突いていたのが、次第に淘汰されてきた結果にすぎないのだと（Darwin, F., 1896 II: 420-421）。まるでダーウィンは精神の存在を感じさせる知的な振る舞いが、信念や知識といった精神に属するものに訴えることなしにどこまで説明できるかという、もう一方の極端を試しているかのようである。

ダニやその他の生物、人間の場合でも、呼吸その他の活動が「あてこんでいる」もろもろの事柄を「信念」として語ることが不適切であるようにみえる理由は、こうした生き物が精神を持たない

生き物だからだという理由——もちろんそれも決定的な理由ではあるが——でも、それが純粹に生物学的・生理的活動に限定されているという理由だけでもないように思われる。それには、信念という概念にとってより本質的な理由がある。それは「信じること」としてのオプションあるいは賭けの本質性に関係している。命題を目的語とした場合の「信じる」と「知る」の使い分けについて論じた際に示したように（浜本2007a: 64-66）、「信じる」という言葉は、その目的語となる命題に対抗する命題が、現実的なオプションとなりうる可能性が認められている場合に用いられる言葉であった。実践の中に——あたかもそこに埋め込まれているかのように——見てとられる「信念」の場合、観察者にとってそれが信念や一種の賭けのように見えるのは、観察者自身が、当の実践が当て込んでいっているところのそれらを一つのオプションとしてとらえ、それ以外のオプションの存在の可能性を認めているからである。灌木の枝の先につかまって下手をすれば何年も待ち続けるダニの振る舞いは、いつかはその下を哺乳動物が通ってくれるという「めったにない幸運」（ユクスキュル 2005: 23）を当て込んだ振る舞いである。空気中に酪酸を感じとり身を投げ出すダニの振る舞いは、獲物がちょうどそのときに都合よく自分の真下に居てくれることを無謀にもあてこんだ行動である。われわれ観察者の目には、それはちょっとしたギャンブル、無根拠な信じ込みのように映る。われわれには他にもっとまじなやり方がありそうに見える、つまり他の可能性がおおいにあることが容易に見てとれるからである。しかし単に遺伝子レベルでプログラムされた手順をそれこそ無心（mindless）に実行しているだけの当のダニ個体には、そうした他の可能性は与えられていない。ダニの「信念」について語りえないのは、むしろこの選択性の欠如、オプションの複数性がそこにはないという事実による。複数の可能性が与えられていないところには信念も賭けも存在し得ない。デネットの言い方に倣って、ダニの食餌システムの設計が一種の賭けのような予想をしているのだと述べることも、やはり不適切である。この例においては、賭けをしている存在などどこにもいない。せいぜい、遺伝子レベルで突然変異という形で盲目的サイコロ振りが繰り返され、その結果がその都度自然淘汰のプロセスに投げ込まれ、その繰り返しのなかで生成してきたシステムがそこにはあるにすぎない。精神の有無は関係ない。仮にダニに人間の脳に匹敵する高度な処理系があり、人間のように考え、意識することができたとしても、こと食餌に関しては盲目的に決められた手順を繰り返すことしかできず、そのやり方以外で振舞うことが全くできないのだとすれば、たとえそのやり方が、どんなにさまざまな世界についての当て込みのうえに初めてうまく行くやり方であったとしても、そこでは信念や賭けについて語ることは出来ないのである。

人間の場合でも同様である。たとえば繰り返し例に持ち出した呼吸のように、他の当て込みに基づいた他の振舞い方の可能性がないところでは、呼吸行動という観察される活動から、空気のあるいは空気中の酸素の存在に対する信念を読み取ったり、我々が空気が存在するという一種の賭けを行いながら生きていと述べることは不適當である。単に生理的な活動のみがこれに当てはまるわけではない。社会的・文化的実践であっても、それ以外の仕方振舞う可能性が端的に認められていないところでは、その実践が何を当て込んでいようとも、我々はそうしたものに対する信念の存在や、賭けについて語るわけにはいかない。たとえそれがどんなに人為的な規則や約束事の上

に成り立っている秩序であったとしても、たとえばファーストフードのカウンターでは、それなりの金額の現金と引き換えるという以外の仕方では食べ物を手に入れるその他のオプションが誰によっても気がつかれていないとすれば、皆が同じくその実践を行っているという事実から、現金で食べ物の提供が保証されているという「信念」をそこから導き出すべきではない。しかし、カウンターで銃やナイフを店員に突きつけることで食べ物の提供を受けることが、十分現実的なオプションとして認知されていたり、うっかりカウンターで食べ物を所望したばかりに有り金すべて巻き上げられる「暴力ファーストフード店」の存在が広く知られているような状況では、ファーストフード店で現金を差し出すというありふれた実践の背後に、明確な信念、ある種の賭けの存在を想定することは理にかなっているかもしれない。

いかなる実践もそれが成り立つ条件として多くの物事を要請しており、いわばそれらを当て込んで行われているのであるが、そうしたものを実践に埋め込まれた「信念」として語ることができるかどうかは、結局、人が真だと評価する命題をその人がもつ知識として語るか信念として語るかの区別がそうであったように、相対的で流動的であり、その実践が展開する空間において、対抗する実践が現実的オプションとして存在し、その空間に所属する人々によって気づかれているかどうかに関係しているのだと言える。信念を問題にするということは、特定の社会空間における文化現象を複数性と混淆性においてとらえるということと同義なのである。

「信念」、あるいは「信じる」という言葉は人類学においては実に厄介な用語である。人類学は、研究者が属している言説空間＝社会空間とは異なるコミュニケーション空間について何かを書こうとしている⁴⁹。しかしこれらの用語は、話者である人類学者が自らの所属する言説空間でのオプションの現実的可能性の評価を基準に使用されるため、対象となる言説空間における過剰に多くの命題が「信念」として語られてしまうことになるし、人々の実践が当てこんでいる物事の過剰に多くが実践に埋め込まれた信念であるかのように語られてしまうことになる。しかしこの点に留意して、人類学者自身にとってのオプションの現実的可能性によって信念を同定することをいったん停止させ、研究対象の社会空間でのさまざまな実践とそれが要請しているさまざまな「当て込み」を、当該社会空間自体において他のオプションがもっている現実的可能性のさまざまな度合いによって評価するならば、きわめて興味深い研究領域が開けるだろう。オプション＝0（賭け度＝0と言ってもよいかもしれない）、つまり環境と人々自身の実践によってその当て込みがつねに満たされ、人々にとって自明の秩序を形作っている——比喩的にはなくほとんど呼吸と同じような活動になっている——ものから、別のオプションが周辺的に現実的な可能性として認知されている状態——逆に言うと、ある特定の実践の方式とそれが要請している当て込みが人々の大多数にとっての「信念」として語られうる状態——を経て、複数のオプションがしのぎを削り、新しい秩序が生成しつつある状態——社会的実践のさまざまな形がイーブンに見える賭けとしてひしめき、それぞれが当て込んでいることがらが、複数の競合する信念として並存している状態——へと至る一連の状態として、社会空間をながめることが可能になるだろう。複数性や混淆性が文化現象の常態である。ある集団の全員が共通の信念や知識をもっているという、人類学の一時期を特徴付けていた

不思議な文化概念は、この賭け空間におけるほとんどありえない極端で限界的な状態にしか当てはまらない。混淆性を文化の常態と見る見方は、今日の人類学で支配的になりつつあるが、それがパターンや秩序の不在や否定を意味するとすれば不毛である。複数的で混淆的な文化状況における秩序とパターンの生成を明らかにすること、それは信念の生態学とでも呼べる研究領域を提示する。

信念と実践の規定関係

浜本2008で見たように、ウィリアム・ジェイムズは信念について「重要なのはそれがどこから来たのかではなくて、それがどこへ導くかである」と主張した (James 1956 [1897]: 17)。信念は、それを信じる人——それが述べている事実を当てにする人——の実践を通じて、社会空間において展開するプロセスに関わる。ある信念が維持されるとすれば、それは信念が導く一連のプロセスがその信念を真理化するからだとしてジェイムズは考えていた。信念につづくこの一連のプロセスが「もしその正しさを確認し続けることになったとしたら、それこそが彼にとってはそれが真実であるということの意味なのである」(ibid.)。信念→実践→結果(→信念)という、ある意味で単純でわかりやすいモデルである。しかしこのモデルにおける信念と実践とのつながりについては、もう少し正確に捉えておく必要があるかもしれない。

第一に、このモデルを特定の信念が特定の行為を決定するという——信念を行為を引き起こす原因のようなものと見なす——一種の行為予測的モデルと勘違いしないようにしたい。「これから為替相場は円安が進む」となぜか信じ込んでしまったとしても、その人がその信念に基づいて何らかの行動に出なければならないという理由はない。ある人が特定の信念を抱いていることを知ったとしても、その特定の個人の行動の予測にはつながらない。傾向として、たとえば、「努力はいつか報われる」と信じる人、そのことを当てにする人は、「努力は無意味だ、運がすべて」と信じる人よりは、現実に努力する傾向にあるとは言えるかもしれないが、そこから具体的な個人が現実に何をするか言えるわけではないし、努力という点についても、彼がかならず努力するに違いないとすら——「どの程度」努力するかは言うに及ばず——確言できない。信念と実践との関係で重要なのは、こうした未来の——とりわけ特定の個人についての——行動予測の方向ではない。あることを「信じる」とは、それを、あるいはそれが述べている事実を、実践において「あてにする」ということである。そのことを「あてにする」からといって、かならずその実践にとりかからねばならないというわけではない。予測方向にはあまり意味がないのである。しかし逆方向には意味がある。ある活動がなされているならば、それを行っている人はその活動を成立させるために必要なさまざまな事柄を「あてこんでいる」はずであって、もし人がそれらを「あてこんでいない」つまり信じていないならば、その活動はそもそもなされなかつただろう、と我々は確言できるからである¹⁶⁾。

前節で指摘したように、人が行おうどのような実践も、多くの事柄を同時に「あてこんで」いる。我々が日常行うほとんどの行為は、言うまでもなく空气中に酸素が含まれていること、その他、実に多くのことをあてにしていることはたしかである。しかし信念として問題にできるのは、任意

の実践がその前提として想定しているこうした数多くの事柄のうちの、ほんの一部である。この意味でも、何であれ特定の信念が行為を決定するという方向では、問題を立てることができないことはわかる。むしろ任意の実践が、数多くの事柄を「あてこんで」はじめて成立しているときに、なぜ特定の一つの信念がことさら問題になるのかが、疑問に思えてくるだろう。どの一つの当て込みが外れても、その実践は等しく成り立たないのであるから。ある若者が陸上競技のトレーニングに多くの時間を捧げているときに、彼のそうした実践が「あてにしている」多くの事柄のうちで、なぜたとえば「努力はいつか報われる」という信念が、「空気中には酸素が含まれる」という同様にその活動があてにしている事実よりも、より重要だということになるのだろうか。この二つに違いはないと考えることは、あきらかに直感に反しているように思われる。我々は彼のトレーニングへの専念を成り立たせている条件として、彼のその信念と空気中に酸素があるという事実とが等しいとは思わない。ジェームズの言い方をを用いれば、その特定の信念こそが彼の練習への専念を導いているのだ——空気中に酸素があるという事実が彼の専念を導いているというかわりに——と言いたくなる。

この直感には根拠がないわけではない。なぜなら我々はある実践について問う際に、暗黙のうちに実際にはその実践と他の可能な実践との差異について考えているからである。ベイトソンが繰り返し強調しているように、我々の精神は情報＝差異の告知 (news of difference) だけしか受け取ることはできず、差異をコード化することによってしか何かについて考えることはできない (Bateson 1979: 79)。上記の若者のトレーニングへの献身は、彼が同じように取りえたはずの他のオプション、トレーニングは適当に切り上げ娯楽にいそしむ等との違いにおいて眺められている。そしてこの違いは、「努力はいつか報われる」という信念と「努力など無駄。要は才能」とか「要は運だ」とかの競合する他の信念との違いと関係付けることができるかもしれない。そのようなときに、我々は彼の実践が——あのオプションではなく、ほかならぬこのオプションをとっているという事実が——彼がもつ特定の信念に導かれたものだと言語することができるのである。実践の違いが、競合する信念の差異に関係付けられる場合、信念の差異はベイトソンがいうところの「違いを生むところの差異 (differences that make a difference)」であることになる (Bateson 1979: 110)。彼の実践があてにしている他の事柄、たとえば「空気中に酸素が含まれている」かどうかは、問題となる実践レベルの差異にはあきらかに関係していない⁷。

重要なのは、実践が他の競合する実践戦略との違いにおいて眺められており (なんらかの特定のオプションの集合の中でとらえられており)、そうした戦略の違いが、それぞれの戦略が世界について違ったことを当て込んでいることから生じ、したがってそうした競合する信念の差異が、まさにベイトソンの言う「違いを生むところの差異」となっているという事実である。信念が実践を導くという言い方は、厳密にはこのような意味で理解されねばならない。つまり、実践上の違い——より正確には実践戦略上の違い——を生み出すところの、それぞれの戦略が「あてにしている事実」の差異として、対立する信念の問題をとらえることができるのである。

ある人が信念A1をたまたま抱いたとしても、それは彼が必ずしも実践 (戦略) S1を採用するこ

とを決定しない。しかしもし人が実践（戦略）S1を採用しているとすれば、彼に競合する実践S2をではなくS1を採用させたのは、競合する信念A2との違いがS1とS2の違いを生じさせるところの信念A1を彼が抱いたからだ。信念が実践を導くというのは、このように言ってよいということである。

競合する信念のいずれかを抱くことは、実践戦略上の差異につながる、世界に対してそれぞれ何をあてにするかという一種の賭けであるが、それぞれの信念＝賭けの配当は、それぞれが導く実践戦略が並存する他の実践とどのような形で切り結ぶかによって変わり、その結果はそれぞれの信念の言説空間における分布と配置に反映するだろう。私が信念の生態学ということで念頭においているのは、特定の言説空間における信念の配置と振る舞いを、競合する他の信念との関係において分析するこうしたアプローチである。

進化ゲーム

ジェイムズの信念論に含まれる上記のようなヴィジョンを理論化するうえで興味深いのが、動物行動学の分野で1970年代に提出された進化ゲームのモデルである。それはある生物種の内部で、特定の表現型（遺伝的にプログラムされた行動様式）がどのように広がり、分布するかを描き出す。その最も単純なモデルでは、集団の各個体は複数の戦略のいずれかにしたがって行動し対戦するのだが、その対戦の結果によって集団内でのそれぞれの戦略のシェアが増減する。うまく行った戦略はシェアを増やす。それによってどのように、その集団内に特定の戦略だけが残ったり（ESS「進化的に安定した戦略」と呼ばれる）、複数の戦略が一定の割合でシェアを分け合いその比率がそれ以上変動しなくなる（多型安定）などの、さまざまな状態が帰結するかを解析する。

この理論が動物行動学の分野で特にうまく行った理由は明らかである。そこでは各個体がとる戦略は遺伝的に決定されたもの、つまり遺伝子のレベルでコード化された行動のプログラムであると仮定することができる。競合する戦略は、おなじ遺伝子座を占める対立遺伝子の差異に導かれたものだと単純化して考えることも許される。うまく行った戦略とは包括適応度を増加させる戦略、つまり他のプログラムとの対戦の結果、相対的により多くの子孫を残すことに結果として貢献した行動プログラムのことである——より正確には、ここではより多くの子孫を残すということが「うまく行く」の定義なのである。子孫は戦略の遺伝子を受け継ぐので、うまく行った戦略のシェアは増えることになる。これはある個体群において、各個体が特定の戦略をとって対戦してみたその結果が、それぞれの戦略のシェアの増減に直結するようなモデルなのである。

この考え方の含意を理解するためには、メイナード・スミスの最初の独創的な試み以来この理論が提示されてきた数学的な表現にはこだわらずに、その最も基本的なモデル「タカ・ハト・ゲーム」を、ドーキンズにしたがって（ドーキンズ 2006: 102-105）——厳密さはある程度犠牲になるが——極端な初期条件からスタートした物語の形で提示することで十分だろう。

メイナード・スミスの基本モデルは次のようなものである。ある個体群の二匹の動物が、資源

——たとえばナワバリ——をめぐって戦う。好適な場所のナワバリで繁殖すれば、残せる子供の数がそうでない場合よりも多いので、対戦に勝ってナワバリを手に入れることには意味がある。この差が対戦に勝った側の得点である。単純化するために、この群れの個体は単性生殖で繁殖すると考える。戦いでは二匹の動物は、誇示 (display)、エスカレート (escalate)、逃げ出す (retreat) の三つの行動をとれるものとする。この対戦において個体は次の二つの戦略のうちのいずれかをとり、特定の個体はいつもおなじ戦略をとる。それは各個体に遺伝的にプログラムされている行動指針である。

タカ戦略：傷つくか相手が逃げ出すまで攻撃をエスカレートさせる

ハト戦略：まず誇示する。相手が攻撃をエスカレートさせると、直ちに逃げ出す

対戦の結果に、ドーキンズは次のような得点を割り振っている。勝者には50点、敗者には0点、重傷者には-100点、長い誇示の応酬による時間の浪費に-10点⁽⁸⁾。タカ派どうしが対戦すると、片方が大怪我をするか死ぬかするまで戦い続ける。勝ち負けは半々だとする。タカ派とハト派の個体の対戦では、ハト派は即座に逃げるので常にタカ派の個体が勝ち、どちらも怪我はしない。ハト派の個体どうしの対戦では、双方とも誇示しあって譲らず、いずれも傷つくことはない。その状態が一方が根負けして立ち去るまで続く。どちらが先に根負けするかも半々だとする。対戦の平均得点が高い個体ほど、多くの子孫を残すので、高得点を生む戦略の遺伝子はその遺伝子プールのなかで増加していくことになる。

このモデルでは、どちらの戦略も進化的に安定ではないことが示される。ハト派ばかりの個体群があったとしよう。ナワバリをめぐる対戦では誰も傷つかず、勝ったほうは50点を得る。ただしにらみ合いで時間を浪費したために、勝者の総得点は40点となる。負けたほうは、単に時間を無駄にただけで終わるので、その得点は-10点である。勝ち負けは半々であるので、この個体群での対戦1回あたりの平均得点(期待値)は、 $40 \times 0.5 + (-10) \times 0.5 = 15$ となる。この個体群の平和はしかし長続きしない。突然変異でタカ戦略をとる個体がこの群れの中に出現するや否や、この唯一のタカ派の個体は、すべての戦いに勞せず勝利し、即座に50点を獲得する。これがそのまま彼の平均得点となる。他のハト派の個体たちは、個体数が極めて多いために、この一匹のタカ派と出会う確率を無視してよいとすれば、先ほどと同様に平均15点ということになる。平均得点において圧倒的に勝るタカ派戦略の遺伝子は、タカ派の個体の方がハト派の個体よりも圧倒的に多くの子孫を残すので、この個体群内で急速に広まっていくだろう。しかし個体群のなかでタカ派戦略の個体が増えてくるに従い、タカ派の個体の対戦相手はいつもハト派というわけにはいなくなり、タカ派戦略のうまみは減っていく。

個体群がすべてタカ派の個体のみの場合を考えてみればよい。そこではすべての対戦がタカ派どうしの対戦となり、勝てば50点だが、負ければ-100点となる。勝敗の確率は半々なので、この場合、対戦あたりの平均得点は $50 \times 0.5 + (-100) \times 0.5 = -25$ となってしまう。この悲惨な世界に、一匹のハト派個体が出現したとすると、その個体はすべての対戦で即座に負けるがけっして傷つくことはないので平均得点0点を得る。これはこの個体群ではタカ派戦略がもたらす得点よりも高得

点ということになり、タカ派の個体よりも結果的に子孫をより多く残すことが出来るので、ハト派戦略の遺伝子が個体群の中で急速に広まっていくことになる。

個体群の中でハト派戦略の個体が圧倒的に多い環境では、タカ派戦略が圧倒的に有利となり、タカ派戦略が広がる傾向を見せ、逆にタカ派戦略の個体が圧倒的に多い環境では、ハト派戦略の方が今度は有利になり、個体群中に広がっていく。この正反対のプロセスには一つの均衡点がある。個体群内のハト派の割合を p 、タカ派の割合を $1-p$ とすると、ハト派の個体は確率 p でハト派の個体と対戦し、確率 $1-p$ でタカ派の個体と対戦することになる。各々での得点は、すでに見たように15点、0点であるので、この個体群におけるハト派の個体の対戦当たりの平均点（期待値）を E_d とすると、 $E_d = 15p + 0 \times (1-p) = 15p$ である。同様にタカ派の個体も確率 p でハト派の個体と対戦し、確率 $1-p$ でタカ派同士の対戦となり、それぞれで50点、-25点を得る。したがって、この個体群におけるタカ派の個体の対戦当たりの平均点 E_h は、 $E_h = 50p + (-25) \times (1-p) = 75p - 25$ である。

$15p = 75p - 25$ より $p = 5/12$ であるので、 $0 < p < 5/12$ であれば $E_d > E_h$ となり、個体群中でハト派戦略の方が得点が高いために、ハト派戦略の個体が増えることになり、逆に $5/12 < p < 1$ であれば $E_d < E_h$ となり、タカ派戦略の方がより高得点を生むので、個体群中のタカ派個体が増えていく。 $p = 5/12$ が均衡点となる。この単純なモデルは、いわゆる多型安定の一例である⁹。

このモデルは、エージェントの側に先見の明的な目的合理性を一切想定することなしに、にもかかわらず結果として、「うまく行く」戦略が個体群の中で普及していく過程を、わかりやすくモデル化している。しかもそれぞれの戦略がどの程度「うまく行く」ことになるかは、その戦略がそれに対抗する他の戦略に対して、その都度どのような比率であるかという条件によって違ってくること、その結果、一つの個体群において複数の戦略が一定の比率で安定的に並存すること、などを説得的に示している。あっけないほど単純なモデルであるおかげで、一つの集団の成員がすべて共通の価値や観念をもち、共通の行動規範に従って行動するといったかつての人類学の文化モデルのどうしようもなさにも否が応でも気づかされるという、副産物もある。人類学の文化モデルは、いわば、ある個体群におけるすべての行動様式等を「進化的に安定な戦略」だと想定するというありそうもない仮定に基づくものだと思われるからだ。また、進化ゲームのモデルは、単なる渾沌や雑然、無秩序を含意することなく混淆性や複数性について語ることができる、という可能性にも気づかせてくれる。

進化ゲーム理論の問題点

進化ゲームのモデルは興味深く示唆的であるが、それらをそのまま文化現象に適用することには、いくつかの問題がある。このモデルは一言で言うと、うまく行った戦略がひろまっていくことをモデル化したものののだが、ここでの「うまく行く」にはかなり限定された意味があたえられている。それを採用する個体により多くの子孫を残せること、というのがここでの戦略がうまく行く

ことの意味なのである。さらに、うまく行った戦略、つまり多くの子孫を残せた戦略が個体群の中で広まっていけるのは、戦略が遺伝的にプログラムされた行動方針であるからである。この二つの条件の両方がそろわないとモデルそのものが成り立たない。言うまでもなく、人間の文化現象において良い戦略かどうかの問題は、その戦略を採用した結果、子宝に恵まれるかどうかの問題ではかならずしもない。しかも、同じく言うまでもなく、人間にとっての実践戦略は遺伝的にプログラムされたものではないので、親から子へとは遺伝しない¹⁰⁾。進化ゲームのモデルをあてはめてみるにしても、文化現象の領域においては、そもそも「うまく行った戦略が集団内にひろまっていく」その仕組み自体を、別に見つけ出してやらねばならないのである。

このきわめて重要な問いは、進化ゲームのモデルを社会事象に適用しようとする多くの議論では、しばしば安易に——しかし数学的には複雑に——処理されているように見える。通常の意味で——このモデルにおける特殊な意味ではなく——「うまく行く」戦略、つまりより儲かったり、高得点をあげたり、通常の意味で多くの利得が得られる戦略が、学習や模倣によってそれを採用する個体を増加させる（あるいはその戦略をとる頻度を増加させる——混合戦略の場合——）といった程度のことしか考えられていない¹¹⁾。たしかに何かをやってみて、うまく行けば同じやり方を続け、うまく行かなければ（損をしたり、ひどい目にあったり）その結果から学んで、別のやり方に変えたり、うまく行っている人のやり方を真似たりするというのは、いかにもありそうな話であるが、もしこれだけのことであれば、なにも大げさなモデルで論じなければならないような話でもなくなる。しかもこの常識的な理解ですら、実際には不適切であることがわかる。進化ゲームで問題になる利得は、各対戦での個々の利得ではなく、無数に対戦を繰り返した結果の平均値である。その平均値が他の戦略よりも高い戦略が「うまく行く」戦略である。模倣や学習においては、プレーヤーである個体は、それに基づいて自分の戦略がうまく行っているかどうかを判定し、学習し、あるいはよりうまく行っている戦略に乗り換えたりしなければならない。そんなことを我々がやっているわけがない。もし我々が自分がやっている戦略がうまく行っているかどうか判定するとすれば、一回一回の対戦の都度、勝った負けたと騒ぐのが落ちで、無数の対戦の後の平均値なんか知りもしないし、知りようもない。学習と模倣のアルゴリズムがあるとすれば、それは愚かで目先の利かない近視眼的なものだろう。ハト派でやっていて、タカ派の個体に情けなく負けてしまうと、では次はタカで行ってみようということになったり、タカになってハト相手にまんまと勝ちをつかめば、図に乗ってタカいいではないか、となり、別のタカに出あって運悪く（確率は半々だとして）負けて傷を負うと、やっぱりハトかもと思ったりする、そんな場当たりの判断の連続であって、長期的展望などもてるものではない。私自身の人生でも思い当たる節がおおいにある。おまけに、このタカ・ハト・ゲームのように多型安定の場合、どちらの戦略が「うまく行くか」はそのとき個体群においてトータルでそれぞれの戦略がどんな比率で分布しているかによるわけであるが、個々の個体がそんなことを把握しているわけもなく、対戦の結果だけから、どちらの戦略が「うまく行くか」を判定しようもないのである。そもそも進化ゲームの最大の理論的ポイントの一つが、個々の主体の先読み予測や合理的選択などをいっさい考慮に入れなくても——まあ、魚や鳥にそ

れを期待するのも無理な話だが——「うまく行く戦略」がその個体群の中に広がっていくことを説明できるところにあったのであるから、こんな中途半端な仕方では学習や先読みを導入したりすれば、元も子もなくなってしまうわけである¹²⁾。

日本でも早くから進化ゲームの社会学への応用に注目していた山岸俊男も、動物行動学における進化ゲーム理論における遺伝とダーウィン適応度の部分を、「強化」つまり学習や「模倣」の原理によって置き換えるだけで、社会事象に適用できるという通常の解決を疑問視している。彼は日本とアメリカとで「一般的信頼」の程度に大きな相違があることを指摘し、一般的信頼つまり未知の他者をどの程度信用してよいかという点での異なる戦略が、どんな条件で特定の社会で支配的になるかを進化ゲーム的に説明しようと企てている。彼によるとそれを強化の原理で説明することはできない。一般的信頼度を高くするという戦略で生きることによって「ポジティブな結果が得られるまでにはかなり時間がかかり、またその結果が一般的信頼を持つことによって得られたのだということを理解するのが困難だと考えられるからである。」(山岸俊男 1998: 156) 同じ理由から模倣の原理による説明も使えない。「一般的信頼と結果との対応が不明確であれば、成功している人を見ても、その原因が一般的信頼にあると理解することは困難だろう。」(同上: 157) 我々が生きていくうえで採用しているさまざまな行動指針についても同様に、結果との結びつきが必ずしもそう明らかではないというこの種のものが多い。何がうまく行く生き方が、結果によってそんなにはっきりしているのなら誰も苦労しない。また、うまく行っている人を真似ようにも、その人のどこを真似たらよいかがいづつもはっきりしているわけではない。まさか髪型とかではないと思うのだが、意外とそんなところばかり真似られたりする。

というわけで、進化ゲームのモデルは文化事象の複数性・混淆性をとらえる点で示唆的で興味深くはあるが、そのままでは適用できないし、そこでの鍵を握るダーウィン適応度という特殊な利得と、遺伝という複製機構を、通常の意味での利得と、学習や模倣でそっくり置き換えるという安易な修正ではあまりうまく行かないのである。

言うまでもないことだが、私は特定の戦略の普及に模倣や学習が働かないといっているのではない。山岸が指摘しているように、特定の戦略の採用とその結果のあいだにはっきりした結びつきがあり、利得がその戦略の採用の結果であることが明らかであれば、それらの原理は当然働く。しかしそれは、誰の目にもうまく行くことがはっきりと見てとれる戦略は、学ばれ模倣されるだろうという、あまりにも当たり前の話であり、そうすると、その普及を説明するのにもはや特殊なモデルを持ち出すまでもないのである。そもそもダーウィンの進化の最大の特徴点は、表現型が表現型へと直接複製されるのではなく、別のレベルの自己複製子 (replicator) つまり遺伝子の複製のプロセスを介して、いわば間接的に複製されるという点にあった。メイナード・スミスらの進化ゲームのモデルの特徴もまさにここにあった。それを生物学的進化の領域から人間の社会現象に適用しようとする際に、戦略が学習や模倣を通じて、まるで直接複製されるかのようなモデルに転落してしまうとしたら、皮肉な話である。

信念と戦略と真理化のプロセス

すでに見たように人間の実践においては、戦略のオプションの複数性は、それぞれがあてにしている世界の状態に関する事実についてのオプションの複数性——信念の複数性——と連動していた。進化ゲーム的な視点——ここではあくまで視点にとどまり、けっして数理的なモデルを志向するものではないが——は、この二つの水準での選択性という観点のもとで、より発見的な価値をもつかもしれない。

動物行動学における進化ゲームの場合も、個体が採用している（遺伝的にプログラムされている）さまざまな戦略がもたらす利得は、二重の意味を担ってはいた。それは、たとえばより快適なナワバリの獲得等々といった利得をもたらす一方で、同時により多くの子孫の獲得という別のレベルでの利得をもち、またそのときに限り、その特定の戦略が個体群の中でどのように広がって安定するかに関係してくる。単になにがしかの利得があるがゆえに広まるのではない、それがより多くの子孫を得るという形でその戦略「のための遺伝子」が個体群中で占める比率の増加をもたらす限りにおいて、それは広まる¹⁹⁾。ただ動物行動学においては、個体の生にとっての利得——個々の個体の生き残りに貢献する——を生殖を通じての遺伝子の増殖に読み替えることが、大筋において可能であり、この二重の意味の違いについては、そう神経を尖らせる必要はなかった。

同様な意味の二重性は、信念と実践の関係においても見られる。特定の信念に導かれた実践——その信念がのべているところの事実を「あてこんだ」さまざまな活動——の帰結は、収入の増減であったり、美的満足や充実感の増減であったり、さまざまな形をとりうる。さまざまな意味でうまく行ったり行かなかったりしうる。つまりなんらかの利得を帰結する。一方、ジェイムズが強調しているように、それらの実践は同時に当の信念をさまざまな度合いにおいて「真理化validation」するものでもあり、それをますます真実らしくしたり、あるいは疑わしくしたりする。前者の場合、人はその信念が述べている事実をますます「あてこんで」振舞うことができ、またより多くの人がそれを「あてこむ」ことを可能にする。後者の場合、実践においてそれを「あてこむ」ことは次第に難しくまた危うくなる。信念と実践との関係におけるこの二つの意味のレベルも、もちろん無関係ではありえないが、生物学での場合とは異なり、しばしば必ずしも単純な読み替えではすまない。生物学的進化の場合ですら、血縁淘汰のケースのように、結果的に個体群においてその遺伝子を広めることにつながるならば、それは個々の個体にとって自らの利得を犠牲にするような行動を導くことがあることが知られている。ドーキンズが『延長された表現型』（ドーキンズ 1987）において論じている事例は、さらに示唆的である。カッコウに托卵されてしまったヨシキリが前者の雛にせっせと給餌するようにしむけられ、自らの繁殖によりも、カッコウの繁殖に貢献している例では、ヨシキリにとって養育がうまく行けばいくほど、カッコウにとっての子孫の増加という利得になる。「動物が他の動物の遺伝子のために働いている」（ドーキンズ 1987: 138）、したがってドーキンズの別の言い方によるならば、ヨシキリの行動はカッコウの遺伝子の『延長された表現型』なのである。

信念と実践においても、実践がうまく行くことと信念が真理化されることが直結しているかのよ

うに論じうる場合があり、実際、ジェイムズも好んでこうした例をとりあげる。「あてこみ」が運悪く外れたり、「あてこみ」そのものが不適切であったりすれば、通常、事はうまく運ばないだろう。信念＝「あてこみ」が真理化されない場合は、実践もまたうまく行かない可能性が高い。逆に事がうまく運んでいる限り、「あてこみ」はまさに当たっていたと言えるかもしれない。しかしこうした単純な関係が成り立つとは限らないケースも多い。ジェイムズ自身があげているベシミズムの例がそうだ。「世の中なにごともうまく行かないようになっていく」という信念は、まさにことがうまく運ばずプラスの利得をもたらさないことによって、ますます真理化される。おまけに、何もかもうまく行くわけがないと信じている人は、何かをすることとしても、まさにこの信念のゆえに実行に身が入らず、必要な配慮や準備も怠るかもしれないので、その結果、実際に事はうまく運ばなかったりする。かくして自分の振る舞いを通じて彼は当初の信念を真理化してしまうわけである。このように信念が、自らを真理化するプロセスを内蔵しているような場合、それがもたらす利得のいかんにかかわらず、まさに真理であることによって存続し、場合によっては言説空間を席卷しうる。

「世の中なにごともうまく行かない」の別バージョン（あるいはより特定化されたバージョン）である「計画通りにはことは進まない」について考えてみよう。こんな信念をもっていれば、たとえ計画を立ててみたとしても、ろくな結果にならないのは見えている。つまりこの信念も自らを真理化するプロセスを内蔵している。この信念のもとでは、計画をたててそれを実現しようとするそのものが無益な行為に見えるので、計画性をもたず場当たりの行動の方が適切に見えてくるだろう。周囲の人々のほとんどがこの信念の持ち主である場合には、仮に対抗的信念「世の中、計画的に事は進む」の持ち主がいたとしても、あまり分が良くない。なぜならその社会空間では、ほとんどの人が場当たりのしか振舞わないので、そんな世界で一人ががんばって何かを計画的に進めようとしたところで、周囲の場当たりの行動のせいでことはうまく運ばない。念入りに計画を立てたり先を見通したりするのに余計なエネルギーを消費した分、そうした労力を省略して場当たりに生きている周りの人々以上に、バカを見ることになる。ここでは「世の中計画通りに進むものだ」という信念は真理化されず、その結果、彼も「世の中計画通りにはけっしていかない」と悟り、その信念がますます広まっていくことになる、かもしれない。

もちろん逆も真である。周囲の多くの人々が「世の中は計画的に事が運ぶ」と信じており、計画的に事を運んでいるような社会空間においては、その結果として、実際に多くのことが予見可能で計画的に進行するので、そこでは計画的に振舞うことがますます容易になり、実際に計画どおりに事は運ぶことになる。つまりその信念は真理化している。しかしもしここに対抗的な信念の持ち主が登場したとするとどうだろう。彼はその場当たりの振る舞いのせいで、周囲と比べて彼が結果的に手に入れる利得は低く、そのお粗末さは際立つことになるが、このことはなにごともうまく行かないという彼の信念を強めることにしかならないかもしれない。事がうまく運ばないことがまさに彼の信念を真理化するからである。ベシミズムの方が手ごわいのだ。

この即興的な例は、現実の記述ではないし、またこれによって何かが立証されるわけでもないが、信念と実践、そしてその結果がどんな風になるかについての、いかにもありそうな話の一つではあ

る。それはすでに紹介した進化ゲームのモデルの振る舞いと似通ったところがある。そこでは、一つの戦略がどんな風にうまく運ぶかは、その個体群中における他の戦略をとる個体との比率によって左右されていた。そしてその結果が、それぞれの戦略をとる個体の増減に結びついていた。ここでもそれぞれの信念＝「あてこみ」に導かれた実践がどんな風に運ぶかは、同じ社会空間に代替的信念がどんな比率で分布しているかに左右され、その実践の結果が、それぞれの信念の真理化の首尾に結びつく。信念は、実践が踏まえねばならない「世界についての事実」という地位をますます多くの人にとってたしかなものにしていったり、逆に、却下されたりすることになる。ただ、この例でもわかるように、実践のもたらす利得と真理化の過程とは、動物行動学における行動がもたらすさまざまな利得とその包括適応度（相対的にどれほど多くの子孫をもつことになるか）との関係以上に、ストレートであるというよりはしばしばよりアイロニカルである。

山岸が指摘していたように、人の実践の多くにおいては、採用された個々の戦略と、それが結果的にもたらす利得との結びつきは、かならずしも直接的でわかりやすくはなっていない。ある人の人生がとんとん拍子に進んでいるとしても、それが彼がとったいくつもの戦略のどれがうまくいった結果なのかは、かならずしもはっきりしない。それが特定の社会空間における特定の実践の広まりを、戦略レベルでの単純な学習や模倣で説明することを困難にする。しかし人間の実践が、実践と、その実践が世界に「あてこんでいる」ことがら——世界が現にどういう状態であるかについての信念——という二重のレベルで選択に晒されているという事実は、この厄介な問題の解決を提供してくれるかもしれない。信念の真理化は、事がうまく運ぶかどうかとは別の独立の評価水準をもっているからである。上の即興的な例からもわかるように、世界の状態についてのある信念が、実践の結果、よりもっともらしく見えるか疑わしく見えるかは、人生がうまく行っているかどうか、事がうまく運んでいるかどうかとは別の話である。そして真理化の過程を経て、よりもっともらしく見えるようになった信念は、実践が「あてこむ」べき事実としての地位を強め、現実により多くの人にとって実践において考慮に入れるべき事実となる。つまり信念として広まりうるのである。

真理化の水準と実践の水準の連動

事がうまく運ぶかどうかという実践の利得構造と、信念の真理化の水準は、それぞれ異なる評価の対象であるにもかかわらず、緊密に連動している。

信念が世界について述べている内容と世界の実際の状態が合致しているかどうか、つまりその真偽は、けっして命題を、人々の実践からは独立に存在する世界の状態と比べるような作業ではない。世界の状態は、いうまでもなく人々の実践の産物という側面をもち、後者から独立ではありえないからである。それは当の信念を抱いている人が世界に対してかかわる実践のあり方に左右される。とりわけ社会的世界においては一層そうである。社会的世界は実践に対して超インタラクティブであり、言わば信念センシティブだからである。

自然的環境の場合、たとえば断崖絶壁を相手にしている場合、行為者がその対象に対してどのよ

うな信念をもち、それに基づいて仮に畏敬の念や愛情をもって接したとしても、憎しみをむき出しに接したとしても、絶壁がそれに応じてその振る舞いを変えたりするわけではなく、人がそれに向って飛び込んでいけば、いずれにせよ彼は生きて帰れないという同じ結果を得るだろう。しかし人間的环境の場合は話が違って来る。ジェイムズは、信念を抱いて行動する結果として、信念どおりの現実には導かれるというケースを好んで取り上げていた。信念が自らを真理化するような実践を導くケースである。

たとえば世の中の人々は自分を嫌い自分に悪意をもっているとなぜか信じ込んでしまった人は、周囲の人々に対していつも警戒を怠らず、決して心をゆるさず、いつも距離をとり続けるだろう。彼に対してなされるかもしれない親切ですら、彼には、彼につけ込もうとする下心の表れと見えてしまう。彼は親切に対してますます警戒を強め、下手をすると仇で返してしまう。このような人物に対して周囲の人々が好感をもつとはとても考えられない。彼が信じていた、周囲の人々の彼に対する悪意は現実のものとなってしまうのである。そして彼がその信念をもち続けることはますます彼にとって理にかなったものになる。

逆に自分は世界から愛されていると能天気にも信じ込んだ人は、常に無防備で友好的に周りの人々に向う。そのせいでひどい目に遭わされたとしても、それは彼にとっては人々の「愛の鞭」にしか見えないかもしれない。彼はその後もいろいろカモにされるかもしれないが、多くの人が彼の好意に好意をもって応えることになるだろう。こうして彼も信念に導かれて行動した結果として信念どおりの現実を見出すことになる。このようにそれぞれの対抗的信念は、それぞれ自らを真理化するプロセスを内蔵したプログラムであるかのように振舞うのである。

進化ゲームにおけると同様に、ここでも分布は大きな要因である。世界は善意に満ちているという信念は、周囲の人々も同じ信念をもっているならばますますうまく行く。しかし周囲の人々のほとんどが世界は悪意に満ちていると信じ、他人に対する警戒を怠らず、相手からやられる前にやれという戦略で行動しているような世界では、世界は私を愛していると信じている人は、あまりうまく行かないかもしれない。もしその信念に徹すれば、彼は完璧なカモか聖人であり、「愛の鞭」も度が過ぎれば、さすがに能天気な彼もその意味を解釈しなおすことになるだろう。というわけで早晩、彼も周囲の人々と同じ信念をもつことになるかもしれない。進化ゲームの場合と同様に、実際の場面ではそれぞれの信念に基づく実践が結果的にもたらす利得のマトリクスに応じた安定点があり、二つの対抗的信念は、同じ社会空間の中である比率で共存したりするのだろう。

対抗的信念の関係は、よりアイロニカルな姿をとっているかもしれない。

たとえば「努力は必ず報われる」という信念は、それが社会空間の中のより多くの人々に抱かれ、皆がその信念に導かれて努力するようになればなるほど、その利得を減らす。皆が努力しているところでは、少々努力したところで追いつかないのである。というわけで、多くの人々がそれを信じれば信じるほど、それは真理化されなくなる。というわけで「努力しても無駄なんじゃないか」「所詮は生れついでに才能だ」「生れついでに身分だ」「運だ」等々の対抗的信念の方が力を得て広まり始めるかもしれない。しかし「努力は無駄」という信念が広まっている社会空間ほど、実際に努力

すれば報われる空間はないのであり、「努力は報われる」という信念に導かれて行動する人の努力が実際に報われる公算が高く、その信念は真理化され、再び広まり始めるだろう。これも再び進化ゲームにおけると同様、何らかの均衡比率で安定したりするのかもしれない。

こうした、対抗的信念がそれぞれの真理化のプロセスを内蔵しつつ、一つの言説空間の内部でせめぎあっているというモデルは、社会空間を賭けの空間としてとらえるモデルとも見ることができる。信念が導く実践の結果の利得のマトリクスと、実践が信念を真理化した結果のオプションの真実らしさの度合いが、賭けを定義する。前者が賭けの利得——その配当とコスト——であり、後者はそれぞれのオプションをなりたたせる「あてこみ」の真実らしさ——通常の賭けにおける確率——に相当する。利得が大きくかつ本当らしいオプションがあるに越したことはないが、そんなにうまい話は稀で、あてこみの真実らしさは高いが利得は少ない大本命のような信念・生き方や、利得は大きそうだがほとんどありえないような大穴狙いの信念・生き方や、ほとんどありえないがコストがあまりにも小さいので気軽に賭けて当たれば儲けもののお遊びのようなギャンブルや、といったさまざまな組み合わせが提示されている格好になっているだろう。主体的に意識的に選択したものか、偶然やら成り行きやらでそうなったかは別として、人々はさまざまな比率でそれぞれのオプションを担い、社会空間においてそれぞれの実践が交錯し切り結び、その産物として新たな利得のマトリクスと「あてこみ」の真実らしさの配分が生成される。言説空間におけるさまざまな対抗的信念の分布が示しているのは、それである。

限定

人が利得を目指して行動するという考え方は我々にはすでに馴染みの見方である。しかし行動はジェイムズが説くように、なんらかの信念の真理化のプロセスという側面をもつ。ここではこれまであまり注目されずにきた後者の側面を強調しつつ、利得と信念の人間の実践における総合について考えてきた。もちろん、信念がそれが導く実践を通して、あるいは対抗する他の信念実践との関係のなかで自己を真理化していくプロセスのみを、過大評価することは禁物である。信念が世界について述べることのもっともらしさを究極で左右するのが世界の物質的状態とでも言えるものであることは言うまでもない。ナチスのユダヤ人強制収容所や、大西洋横断の奴隷船の中で「努力は必ず報われる」と語るのは今ではたちの悪い冗談にもならないだろう。ジェイムズが信念について強調していたように、我々はどんな信念でも自由にもてるというわけではなく、特定の社会空間において現実的でありうるような「真正なオプション」をしか信念としてもちえないのであるから。

また議論を単純化するため、ここではあたかも信念を単独の命題であるかのように考えてきた点にも注意が必要である。多くの信念は単一の命題としてよりも、他の複数の命題を引き連れた群れの姿で存在する。群れを構成する一群の命題のどれが実践上の違いにつながる差異に関係しているのかは、個別に見いだされねばならない。宗教を例にとればわかるように、しばしばこうした信念群のなかには「世界は巨大な亀の背中の上に乗っている」といった類の一見どうでも良いように見

える信念もけっこう紛れ込んでいる。対抗的信念といっても、亀の背中か、カバの背中か、で議論しても意味はないだろう。世界への実践的働きかけに違いを生むような違いだけが重要なのである。

またジェイムズのペシミズムの例のように、その信念に導かれた人の振る舞いを通じてもたらされる真理化が、当人にとってというよりも——というのはジェイムズの例ではペシミズムの信念に導かれたその個人は自殺してしまうのであるから——もっぱらその社会空間の他の成員に対して作用し、それゆえある種の感染力をもつ信念もあるかもしれない。この世ははかないと信じて自殺する人々の増加は、当人たちに対して以上に、他の人々の目にこの世を実際に無意味ではかないものに見せるのであり、また計画などうまく行かない、出たところ勝負だと信じて生きる人々の増加は、世の中そのものの無計画性を増大させるので、当人たちにとって以上に、他の人々にとって世界をますます予測不能で出たところ勝負の世界に見せてしまうだろう。信念と実践の社会的帰結に対する関係は、とてつもなくアイロニカルでありうるのである。 -

イソップにこんな話がある。死に瀕した農夫が彼のぐうたらな息子たちを死の床に呼んで、「私の葡萄畑には宝物が隠してある」と告げる。息子たちは父の死後、鋤や鍬を手に耕作地の隅から隅まで掘り返した。宝物は見つからなかったかわりに、葡萄が何倍もの実をつけた、という話である。信念が導く実践が短絡的に当の信念の真理化のプロセスとして完結すると考える理由すらない。それは一見無関係な諸帰結の長い連鎖を通じて、めぐりめぐって元に戻ってくるかもしれない。

信念の生態学は、特定の言説空間におけるこうしたさまざまな信念（群）の振る舞いを丹念に記述していくことになるだろう。それは成員の全員が同じ信念を共有しているといった、かつての文化概念を、対抗的信念のオプションがそれぞれに実践を導き、それらが社会空間の内部でせめぎあい、渡り合うことを通じて、結果的に生み出す利得構造を介して、それぞれの信念の真理化の度合いを決め、それによって再帰的に信念の分布を再決定するといった形で、文化をその複数性・混淆性においてとらえつつ、それを単なる無秩序に解体してしまわない新しい見方に実質的な内容をあたえてくれるかもしれない。

架空の事例による議論をこれ以上重ねることには意味はないだろう。もしここで触れたような信念の生態学に幾分かでも可能性が認められるとするなら、それはなによりも具体的な社会における具体的な事例の分析と理解の中で試されねばならない。私はモデルのモデルとしての精緻化そのものにはあまり興味がない。現在とりくんでいる問題、東アフリカ海岸部における妖術信仰、を扱ううえで使えそうな道具が欲しかっただけなのである。迂回はこのあたりでやめることにしよう。

註

- (1) 信念（「信じている」の対象となる命題）が知識（「知っている」の対象となる命題）になるために、その命題が真であるという主張の正当化が必要であるという、知識の哲学における見解にも実は一理あることを、ここで付け加えておいておきたい。特定の言説空間において、その命題を信じている人の分布が、どうであろうとも正しい手続きで証明された、明確な証拠のある事実については人は「知っている」ということができる。これは「信じている」と「知っている」との使い分けが、その命題Pに対抗する命題Qがオプションとして存在しうる現実的可能性に対する評価である（単純に言うと、現にQを真だと見なす人々がいるという話者の評価）という私の見解に対する反証であるかのようにみえる。しかしそうではない。このように証明された事実の場合には、それに反する事実を真と主張しうる「現実的可能性」が証明という事実によって封じられているのであり、話者にとっては、P以外のオプションは存在し得ない。この場合は、言説空間についての話者の評価は「私はPと信じる。Qと信じる人もいるが。」という形ではなく、「私はPだと知っているが、Qだと信じる人もいる。」という形をとるだろう。
- (2) 詳しくは浜本2007aの議論を参照されたい。
- (3) ジェイムズの真理化のプロセスという考え方の、知識の哲学に対する含意については、浜本2007bを参照されたい。
- (4) これとは別の方向にある落とし穴が浜本2007で批判した、信念を人間の心の状態としてとらえようとする見方であることは、あえてことわるまでもないと思う。
- (5) 私は言説空間、社会空間、コミュニケーション空間の三つの言葉を同じものを指すのに使っている。ただし、言説空間というときにはそのネットワークを流れるメッセージを中心にそれを眺め、社会空間というときはそこでの対世界（対他関係を含む）実践に、コミュニケーション空間というときには、そこでの情報伝達行為に、それぞれ焦点が当てられている。
- (6) 人が何かを当てにする程度はさまざまでありうる。円安が進むと信じている人も、わずかであるにしても、さまざまな程度で円高になる可能性も念頭においている。円高になるかもしれないと思いつつ、円安が進むことを当て込んで外貨預金に手を出している人は、そうした危険を考えて、投資の額を決めていたりするのだろう（全財産をつぎ込むようなことはせずに）。

この節では、さしあたって信念に対するいわば信じる「程度」の違いの問題は捨象する。これは個々人を分析の単位とするときには大きな問題になるかもしれないが、実は社会空間の問題として信念を問題にする上では、あまり重要ではない。半信半疑であろうと、危険の可能性を恐れつつであろうと、外貨預金を行うという行為は「円安が進む」ことを（少なくとも「円高にはならない」ことを）当て込んだ行為なのである。そこには度合いの問題は入ってこない。個人の内部での当て込む度合いの問題は、社会空間全体においては、「外貨預金を行う」という選択がどれくらいの規模で採用されるかという分布の問題に置き換えて考えることができるか

もしれない。

- (7) ここでは話を単純化するために、実践が単一のオプション集合に属するかのようには語っている。実際には、いかなる信念が問題の実践を導いているのかは、その実践と他のオプションとの差異がどのような形でとらえられているかによっても違ってくる。上の例でも、トレーニングへの専念の度合いの違いで見ると、陸上競技への専念／格闘技への専念とか、陸上競技への専念／勉強への専念といった異なるオプション集合の中で見ることにも出来る。それぞれのオプション集合ごとに、どのオプションをとるかの「違いを生む差異」として問題になる信念としては、別のもの——「自分は頭は人並みだが身体能力は他人より優れている」など——が関与的になっているかもしれない。なんであれ、ある実践が他の競合する実践との違いにおいて眺められており、その違いが、それぞれの戦略がおこなっている世界についての当て込みの違いに由来するという点が重要なのである。
- (8) この配点は、単にモデルの振る舞いを示す目的で、適当に設定された数字に過ぎない。後に示される均衡点の比率も、当然この配点に応じて違ってくる。おなじタカ・ハト・ゲームの利得をさまざまに変化させた場合のモデルの振る舞いの違いについては、大浦宏邦2008がわかりやすい。
- (9) 同様な分析で私が気に入っているものの一つに、求愛と交尾をめぐる雌雄の駆け引きの戦略についてのドーキンズによるメイナード・スミス流の分析がある（ドーキンズ 2006: 241-245）。タカ・ハト・ゲームの場合もそうなのだが、これらの多型安定のモデルにおいては、それぞれ違った特定の戦略をとる異なる個体がいると考える代わりに、個々の個体が行う行動のある割合を一つの戦略で、残りを別の戦略でという風に割り振っていると考えると、同様な分析が可能である。
- (10) 遺伝の代わりに教育を持ってくるというのは誰でも考え付きそうなことである。人間の進化の過程で、子供は親の言うことを無批判に受け入れる傾向をもつという、親と子のあいだの「情報スーパーハイウェイ」を進化させてきたという説（Dennett 2006: 130）を認めたとしても、それは遺伝ほど完璧な戦略の複製を保証しないだろう。その点は大目に見るとしても、そもそも、親から子へ伝えられるそれらの「戦略」が、結果として、多くの子孫をもたらす戦略だと考えろと言われても無理な話である。
- (11) もちろんこの想定で、進化ゲームでいうところの利得＝戦略を採用する個体の増加率は、通常の意味での対戦の利得（お金が儲かるとか）の関数になるので、普通の意味でうまく行く戦略が進化ゲーム的な意味でもうまく行く戦略になることは確かである。
- (12) 仮に、近視眼的でなく長期的展望にたち合理的計算ができる主体であったとしても、戦略を鞍替えしようとして、どちらの戦略がよりうまくいっているのか判定しようとすれば、個体群におけるその比率を知らねばならない。しかしこのモデルが想定しているように、個体が個々の対戦ごとに戦略を乗り換えてしまえるのだとすれば、まさにその事実によって、比率がその都度がらりと代わってしまいうることになり、その長期的展望にたった判定すら不可能だとい

うことになってしまう。

こうした点をたくみに回避するように工夫された「エレガント」なモデルもある。それによると、個体は直前の対戦の結果に左右されるのだが、その際同時にランダムに任意の他のプレイヤーの対戦結果を一つ参照し、この二つを比べ、良いほうに鞍替えする、といった変更手順を想定するなど。個体は近視眼的なままで、ランダムな参照（参照相手は戦略の分布によって確率的に決まる）を通じて、戦略分布の全体像を勘定に入れた決定ができることになる。一連のモデルについては Weibull 1997、大浦宏邦 2008などを参照のこと。

- (13) 「のための遺伝子」という言い回しは誤解を招きやすい。その正確な意味についてはドーキンス1987において詳しく説明されている（ドーキンス 1987: 50-67）。一言で言えば、ある特性が自然淘汰によって進化するためには、その特性について個体群内に遺伝的変異のあることが必要であり、そして、「ある特性X『についてのその個体群内の遺伝的変異』というのが、X『のための遺伝子』と我々が手短かに言うときにまさに意味していること」（ドーキンス 1987: 50）だということになる。

参考文献

- Bateson, G., 1979, *Mind and Nature: A necessary unity*, New York: Bantam Books.
- Darwin, F., ed., 1896, *The Life and Letters of Charles Darwin, including an Autobiographical Chapter*, In two Volumes, New York: D. Appleton and company. (reprinted in 1972 from an original copy, New York: AMS Press.)
- ドーキンス, R., 1987, 『延長された表現型：自然淘汰の単位としての遺伝子』日高敏隆他訳, 紀伊國屋書店 (Dawkins, R., 1982, *The Extended Phenotype: The Gene as the Unit of Selection*, San Francisco: Freeman)
- ドーキンス, R., 2006, 『利己的な遺伝子＜増補新装版＞』日高敏隆他訳, 紀伊國屋書店 (Dawkins, R., 1976, *The Selfish Gene*, Oxford University Press.)
- デネット, D., 2001, 『ダーウィンの危険な思想：生命の意味と進化』(山口泰司監訳) 青土社
- Dennett, D., 2006, *Breaking the Spell: Religion as a Natural Phenomenon*, Penguin Books.
- 浜本満, 2007a, 「他者の信念を記述すること」『九州大学大学院教育学研究紀要』第九号（通巻 第52集）pp.53-70.
- 浜本満, 2007b, 「イデオロギー論についての覚書」『くにたち人類学研究』Vol.2 pp.21-41.
- 浜本満, 2008, 「信念と賭け：パスカルとジェイムズ－社会空間における信念の生態学試論1－」, 『九州大学大学院教育学研究紀要』第十号（通巻 第53集）pp.23-41.
- James, W., 1956 [1897], *The will to believe, and other essays in popular philosophy*, New York: Dover Publications
- Mannoni, O., 1990, *Prospero and Caliban: The Psychology of Colonization*, Ann Arbor: The

University of Michigan Press.

メイナード・スミス, J., 1985, 『進化とゲーム理論—闘争の論理—』 寺本英, 梯正之訳, 産業図書

大浦宏邦, 2008, 『社会科学者のための進化ゲーム理論: 基礎から応用まで』 勁草書房

Pascal, B., 1958, *Pascal's Pensées* (introduction by T.S. Eliot, translated by W.F. Trotter), New York: Dutton.

Weibull, J.W., 1997, *Evolutionary Game Theory* (reprinted edition), MIT Press.

山岸俊男, 1998, 『信頼の構造: こころと社会の進化ゲーム』, 東京大学出版会

ユクスキュル・J・フォン., 2005, 『生物から見た世界』 (日高敏隆・羽田節子訳), 岩波文庫

Belief and Evolutionary Game Theory: Steps to an Ecology of Belief II

Mitsuru HAMAMOTO

Being a continuation of my previous two papers (Hamamoto 2007a, 2008), this paper aims to depict a theoretical outline of an approach which I may call an ecology of belief. It sees the discursive space of a society as heterogeneous space of plural mutually competing beliefs. But this does not mean it is chaotic nor disorderly. Ecology of belief tries to describe and explain the orderly features of the discursive space of a society through analyzing the dynamics of competing beliefs and its configuration within a society. As I argued in my previous paper, pragmatism of William James, with its explicit emphasis on what a certain belief leads to rather than where it comes from (James 1956 [1897] :17) , offers a good starting point. Competing beliefs are analyzed in their practical outcomes, i.e., what differences they make in consequent strategies or programs of acting, each accruing differential utilities and, in James' term, differential "valid-ations".

As a model of dynamics of competing strategies, of how a particular strategy spreads or how competing strategies coexist in certain proportions among an animal population, evolutionary game theory in ethology has been highly successful and insightful. But, in spite of many attempts, it is rather problematic to apply the evolutionary model directly to human social phenomena. In this paper I point out some reasons why it is not directly applicable to cultural phenomena, and suggest some necessary modification of the theory, which takes beliefs into account and incorporate Jamesian pragmatic point of view.